【法華経八巻二十八品】

法華経は八巻二十八品からなり、開経の無量義経、結経の仏説観普賢菩薩行法経各一巻を入れて十巻ともいう。その内容を巻別にあげれば、

無量義経（開経）＝徳行品第一、説法品第二、十功徳品第三

妙法蓮華経巻一＝序品第一、方便品第二

妙法蓮華経巻二＝譬喩品第三、信解品第四

妙法蓮華経巻三＝薬草喩品第五、授記品第六、化城喩品第七

妙法蓮華経巻四＝五百弟子受記品第八、授学無学人記品第九、法師品第十、見宝塔品第十一

妙法蓮華経巻五＝提婆達多品第十二、勧持品第十三、安楽行品第十四、従地涌出品第十五

妙法蓮華経巻六＝如来寿量品第十六、分別功徳品第十七、随喜功徳品第十八、法師功徳品第十九

妙法蓮華経巻七＝常不軽菩薩品第二十、如来神力品第二十一、嘱累品第二十二、薬王菩薩本事品第二十三、妙音菩薩品第二十四

妙法蓮華経巻八＝観世音菩薩普門品第二十五、陀羅尼品第二十六、妙荘厳王本事品第二十七、普賢菩薩勧発品第二十八

仏説観普賢菩薩行法経（結経）

うのである。そして授記については、爾前経にも菩薩、善人、男、人天の授記はあるが、二乗、悪人、女人、畜生の授記は、法華経独特であるから、法華経にかぎり二乗作仏というのである。

この品で中根のための譬説周は終わり、最後の二頌半の偈頌に下根の声聞のために「宿世の因縁、吾れ今当に説くべし、汝等善く聴け」と宿世の因縁を説いて開悟せしめようと、次の化城喩品を説くことになるのである。

化城喩品第七

この品は、法華三周のなかの、第三因縁周の正説を説いたものである。

法説・譬説の二周ではまだ領解しない下根の声聞のために、久遠以来の師弟の宿世の因縁を説いて、ついに得道させるのである。

まず、前段に、三千塵点劫の久遠における大通智勝仏の出世成道を説き、十六王子の請いによって半満権実の法輪を転じ、ついに法華経を説いて出世の本懐を遂げて入定し、次に十六王子が法華経を覆講して大衆に結縁するのである。

次に後段では、この因縁を譬喩として説くために、化城の譬喩を説かれて、二乗の涅槃は、化城のようなもので真実ではなく、「宝処は近きに在り、此の城は実に非ず。我が化作ならくのみ」であると説き、「仏道は長遠なり。久しく勤苦を受けて、乃し成ずることを得べし」と説かれるのである。化城は三乗であり、宝処は一仏乗の譬えである。

五百弟子受記品第八

この品と次の授学無学人記品の二つは、因縁周の授記段である。

因縁周でも領解、述成の二段はあるが、前の譬説周の領解段（信解品）、述成段（薬草喩品）のように長くないので、これを授記中に摂したのである。

さないで、迹門の大地を破って、上行などの四菩薩を上首とした本眷属六万恒河沙の菩薩衆を召して涌出させるのである。

下方涌出の菩薩は三十二相を具し、しかも多数であることに、此土の菩薩は疑念を起こし、弥勒菩薩が請を結び、なお他土の無量の菩薩も疑念を生じ、十方分身の諸仏がおさえて、本門の涌出序、疑念序を終わる。後半は、前の大衆の疑念を代表して弥勒が請うたので、いよいよ釈尊の遠寿を顕わそうとした正宗分の小序ともいうべき誡許の一段がある。

そして、略開近顕遠を説き、動執生疑するのである。そのなかで、弥勒菩薩は「父少く子老ゆ」の喩えを説き「願わくは今、解説を為せ」と騰疑致請して、ついに寿量品が説かれることになるのである。

如来寿量品第十六

如来とは、十方三世の諸仏、二仏、三仏、本仏、迹仏の通号である。別して本地三仏の別号である。寿量とは十方三世・二仏・三仏の諸仏の功徳を詮量するので、寿量品という。いまは正しく本地の三仏の功徳を詮量するのである。

この品の一章こそ、釈尊出世の本懐、一切衆生成仏得道の真実義である。寿量品が説かれたことによって釈迦仏法はすべて完結するのである。寿量品は釈迦一代五十年の説法の完結編であり、生命であり、眼目である。日蓮大聖人いわく「一切経の中に此の寿量品ましまさずは天に日月無く国に大王なく山海に玉なく人にたましゐ無からんがごとし、されば寿量品なくしては一切経いたづらごとなるべし」（寿量品得意抄一二一一ページ）と、この品の重要なことを説かれている。

前品で、弥勒菩薩が大衆を代表して疑念を釈尊に問うたので、まず、この品の初めに釈尊は「汝等当に如来

の誠諦の語を信解すべし」と三誡せられたが、弥勒は大衆の上首となって、「我等当に仏の語を信受したてまつる」と三請してやまなかったので、釈尊はさらに重誡して「如来秘密神通之力」を説いて、広く開近顕遠し、断疑生信するのである。

文は、法説と譬説と偈頌の三段に分けられるのであるが、法説では、三世常住の益物が中心となり、正しく五百塵点劫の久遠の本地を開顕して、「我実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由佗劫なり」と説かれ、譬説では、良医の喩えを説かれ「擣篩和合」の良薬を服せしめて、不失心者は病ことごとく除き愈えしめたが失本心の者には、是好良薬を今留在此して、遣使還告して、未来の益を説かれているのである。偈頌は、長行を重頌している自我偈のことである。

しからば、文底の立ち場から如来寿量品を読めば、どうなるか。

日蓮大聖人は御義口伝下（七五二ページ）にいわく「如来とは釈尊・惣じては十方三世の諸仏なり別しては本地無作の三身なり、今日蓮等の類いの意は惣じては如来とは一切衆生なり別しては日蓮の弟子檀那なり、されば無作の三身とは末法の法華経の行者なり無作の三身の宝号を南無妙法蓮華経と云うなり」と。

同じく御義口伝下（七五三ページ）にいわく「然りと雖も而も当品（如来寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す云云」と。

分別功徳品第十七

この品は、略広に開近顕遠して、菩薩大衆は種々の功徳を得たのであるが、その功徳の浅深不同を分別することを説いたので、分別功徳品というのである。

法師功徳品第十九

流通分のなかの弘経の功徳が深いことを明かしたなかで、初随喜品の因の功徳を明かして流通を勧めることは、前品で説かれたから、この品では、初随喜品の、果の功徳を明かして流通を勧めるのである。

すなわち、五種法師（受持・読・誦・解説・書写）が、おのおの、六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）清浄の功徳を明かしたので、これは五品のなかの初品の随喜品（天台の観行即）の人が、十信位（相似即）に上って得られるところであるから、初品の果の功徳を説くというのである。

この品は、総じては、六根の功徳を明かし、八百、千二百とおのおの功徳の数の異なりはあるけれども、結局は、六根の功徳は、互いに円融して功徳の差別はないのである。また、別しては、おのおの清浄を得ることを説いている。

常不軽菩薩品第二十

流通分のなかで弘経の功徳が深いことを明かしたなかの第三段、法華経を信じる者と毀る者との罪福を引いて証とし、流通を勧めるのである。

この品を常不軽菩薩品と称するのは、過去の常不軽菩薩の因縁を引いて説いているからである。不軽とは、身に不軽の行を立て、口に不軽の教えを述べるから、不軽というのである。この品は釈尊の本生譚に事よせて、威音王仏の滅後像法の法華経を受持した常不軽菩薩は六根清浄を得たものであることを説いて、今日の釈迦仏の滅後の受持の修行を勧めたのである。

前品では六根清浄の果の功徳を明かしたが、この品では六根清浄の因の修行を説いた。すなわち六根清浄を得ようと思うならば、難に耐えて一心に弘経すべきであることを教えたのである。

また、不軽軽毀の四衆は、千劫に阿鼻地獄で大苦悩を受くと説き、法華経の信毀罪福の果報を明らかに説いているのである。

なお「我深敬汝等、不敢軽慢、所以者何、汝等皆行菩薩道、当得作仏」（我深く汝等を敬う、敢て軽慢せず、ゆえんはいかん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし）の文は、不軽の二十四字の法華経として有名である。

如来神力品第二十一

分別功徳品の半品と、随喜功徳品、法師功徳品、不軽品の三品半は功徳流通を明かし、次の八品は付嘱流通を説くのである。付嘱流通とは、釈尊の付嘱によって経典の流通を勧めることである。

この品は、地涌の菩薩が、釈尊の勅命を受けて、弘経することを説いたのである。

神力品と名づけるゆえんは、深法を付嘱するために十種の神力を現ずるからである。そして、結要勧持して、称歎付嘱、結要付嘱、勧奨付嘱、釈付嘱とし、結要付嘱に「要を以って之を言わば、如来の一切の所有の法、如来の一切の自在の神力、如来の一切の秘要の蔵、如来の一切の甚深の事、皆此の経に於いて宣示顕説す」とあり、これを天台大師は、五重玄の依文とし、日蓮大聖人は三大秘法の依文とせられたのである。

嘱累品第二十二

この品は、一切の菩薩に如来が摩頂付嘱することを明かすのである。

嘱累とは、諸菩薩を累わして、弘経を嘱託することである。

諸菩薩は付嘱を受けて「世尊の勅の如く当に具さに奉行すべし」と三誓して付嘱のことが終わって、諸の分身仏をおのおの本土に還らせて、多宝仏の塔を閉じて元のようにしたのである。

【迹門と本門】

迹とは影という意味で、本体、実体に対する言葉。門とは真実に入る門、法門という意味である。

法華経二十八品のうち序品第一より安楽行品第十四までを迹門、涌出品第十五より勧発品第二十八までを本門という。迹門の肝心は方便品第二で、諸法実相に約して理の一念三千を説き、また二乗の作仏を説く。本門の肝心は寿量品第十六にあり、久遠実成を説き顕わし、因果国に約して事の一念三千を説き、そのうえで神力品において地涌の菩薩に法を結要付属している。釈迦は法華経の前十四品では、インド応誕の立ち場で理論上の実相観を述べたのに対して、後の十四品では永遠の生命観に立って、事実の上から宇宙および生命の実相を述べているので、迹門と本門に立て分けられるのである。以上の点は諸御書にお示しのとおりである。

開目抄上（一九七ページ）　此等の経経に二つの失あり、一には行布を存するが故に仍お未だ権を開せずとて迹門の一念三千をかくせり、二には始成を言うが故に尚未だ迹を発せずとて本門の久遠をかくせり、此等の二つの大法は一代の綱骨・一切経の心髄なり（以上は爾前四十余年の権経）、迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顕本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるにに似たり（以上は迹門十四品）、本門にいたりて始成正覚をやぶれば四教の果をやぶる、四教の果をやぶれば四教の因やぶれぬ、爾前迹門の十界の因果を打ちやぶって本門の十界の因果をとき顕す、此即ち本因本果の法門なり、九界も無始の仏界に具し仏界も

無始の九界に備りて・真の十界互具・百界千如・一念三千なるべし(以上本門)。

文底秘沈抄（富要三巻七一ページ） 迹門を理の一念三千と名づく是れは諸法実相に約して一念三千を明す故なり、弘の五の中に云く「既に諸法と云う故に実相即十なり既に実相と云う故に十即実相なり」云云……北峯に云く「諸法十界十如を出でず故に三千を成ず」云云、又本門を事の一念三千と名づくるは是れ因果国に約して一念三千を明す故なり、本尊抄に云く「今本時の娑婆世界は三災を離れ四劫を出でたる常住の浄土なり、仏既に過去にも滅せず未来にも生ぜず所化以て同体なり、此れ即ち己心の三千具足の三種の世間なり」云云、此の文の中に因果国明らかなり、文句第十に云く「因果是れ深事」等云云。

そして迹門と本門には天地のような勝劣があるゆえに、御書には次のようにある。

治病大小権実違目（九九六ページ） 法華経に又二経あり所謂迹門と本門となり本迹の相違は水火天地の違目なり、例せば爾前と法華経との違目よりも猶相違あり爾前と迹門とは相違ありといへども相似の辺も有りぬべし、所説に八教あり爾前の円と迹門の円は相似せり爾前の仏と迹門の仏は劣応・勝応・報身・法身異れども始成の辺は同じきぞかし、今本門と迹門とは教主已に久始のかわりめ百歳のをきなと一歳の幼子のごとし、弟子又水火なり土の先後いうばかりなし、而るを本迹を混合すれば水火を弁えざる者なり。

妙一女御返事（一二六一ページ） 又法華経の弘まらせ給うべき時に二度有り所謂在世と末法となり、修行に又二意有り仏世は純円一実・滅後末法の今の時は一向本門の弘まらせ給うべき時なり、迹門の弘まらせ給うべき時は已に過ぎて二百余年になり、天台伝教こそ其の能弘の人にてましまし候いしかどもそれもはや入滅し給いぬ、日蓮は今時を得たり豈此の所嘱の本門を弘めざらんや、本迹二門は機も法も時も遙に各別なり。

【三種の法華経】

法華経といえば、釈尊の説いた二十八品の法華経のみと思われているが、法華経にも次の三種がある。すなわち正法時代の法華経、像法時代の法華経、末法時代の法華経である。

仏法の流布には時が大切である。

釈尊滅後の千年間を正法、その後の千年間を像法、また釈尊滅後二千年以後を末法という。正法の時代は釈尊に縁の深い衆生がひじょうに多い時代であり、像法の時代の衆生は縁が浅い。そして末法の時代は、釈尊にはぜんぜん縁のない衆生ばかり生まれてくる。さらに釈尊の説いた仏法に少しの功徳もなくなった時を末法というのである。

正法、像法の時代には釈迦仏法に利益があるが、末法の時代には釈尊の出世の本懐といわれる法華経二十八品にもまったく利益はなくなり、ただ末法の御本仏日蓮大聖人の仏法にのみ利益があるのである。

さて、正法の法華経とは、釈尊出世の本懐である法華経二十八品であり、像法の法華経とは、天台の説いた摩訶止観である。そして末法の法華経とは、末法の御本仏であられる日蓮大聖人の説かれた南無妙法蓮華経の七文字の法華経である。

したがって「日蓮宗」と名のりながら稲荷や鬼子母神や帝釈天などの謗法物と一緒に、末法の衆生に無縁の釈迦仏像などをまつるのは、大きな誤りといえよう。

めに、まず白毫の光りを放って娑婆世界を変じて清浄にし、諸の天人を他土に移し、さらに八方おのおの二百万億那由他の世界を変じて清浄にし、諸の天人を他土に移した。そしてそこへ十方分身の諸仏を集めて多宝の塔を開き、十方世界は通じて一仏土である相を現わした。これを三変土田または三変浄土という。

日寛上人は観心本尊抄文段下（富要四巻二五三ページ）に「釈籤の第七の意三変土田を以って正しく同居の浄に約し兼ねて実報方便となす故に、三変は同居の浄土方便実報なり」と説かれている。

同居とは凡聖同居土、すなわち娑婆世界のことで、釈迦が直接教化する国土のこと。方便とは方便有余土、すなわち方便道を修行して見思惑を断じたが、まだ塵沙惑・無明惑を残している二乗、菩薩の住む国土のこと。実報とは実報土で、菩薩のうちで中道を証得し、無明を断破したものが住む国土である。この三土を迹土といい、本仏の住処である寂光土を本土という。

宝塔品では三土を浄化して通じて一仏土にしたというが、本門にいたって本仏が顕われおわれば、ことごとく常寂光土となるのである。

【三千塵点劫と五百塵点劫】

三千塵点劫は化城喩品第七にある。

我過去世の、無量無辺劫を念うに、仏両足尊有しき、大通智勝と名づく。人あって力を以って、三千大千の土を磨って、此の諸の地種を尽くして、皆悉く以って墨と為して、千の国土を過ぎて、乃ち一の塵点を下さ

ん、是の如く展転し点して、此の諸の塵墨を尽くさんが如し、是の如き諸の国土の、点せると点せざると等を、復尽く抹して、塵と為して一塵を一劫と為ん、此の諸の微塵の数に、其の劫復是れに過ぎたり。

また五百塵点劫は如来寿量品第十六にある。

譬えば、五百千万億那由佗阿僧祇の三千大千世界を、仮使人有って、抹して微塵と為して、東方五百千万億那由佗阿僧祇の国を過ぎて、乃ち一塵を下し、是の如く東に行きて是の微塵を尽さんが如き……是の諸の世界の、若しは微塵を著き、及び著かざる者を尽く以って塵と為して、一塵を一劫とせん。我成仏してより已来、復此に過ぎたること百千万億那由佗阿僧祇劫なり。

以上のように迹門には化導の始まりを三千塵点劫と説き、本門には成仏を五百塵点劫の昔にありとして久遠以来の師弟の関係を説き明かしている。しかして三千塵点劫は長い昔であっても、五百塵点劫に対すれば、昨日のようなものであり、また五百塵点劫といえども、久遠元初以来、本有常住の御本仏たる日蓮大聖人に対すれば、昨日のようなものである。

【記小久成】

記小の小とは二乗、記とは授記のことで、迹門において二乗が釈迦から成仏の授記を授けられたことをいう。久成とは久遠実成のことで、本門寿量品で五百塵点劫の本地を顕わしたことをいう。法華経が爾前経と比較して法門の内容がすぐれている二つの特徴をいい表わしたものである。

【大通智勝仏】

法華経化城喩品に説かれる仏である。三千塵点劫という遠い昔に出世して法華経を説いたといわれる仏で、大相という時代に好成国の転輪聖王の太子として生まれた。国王となって十六人の王子をもったが、後に出家して修行を積み仏となった。二万劫の間、法華経を説かなかったが、十六王子の請いによって説いた。そのとき、十六王子と少しの声聞は法華経を信受して功徳を得たが、多くの衆生は疑いを起こして信じなかったので、十六王子が諸国へ行って父の説いた法華経を繰り返して多くの衆生を化導した。これを大通覆講といい、その説法を聞いたことを大通結縁という。

十六人のうち、東方に二仏、すなわち阿閦と須弥頂、東南方に二仏、師子音と師子相、南方に二仏、虚空住と常滅、西南方に帝相と梵相、西方に阿弥陀と度一切世間苦悩、西北方に、多摩羅跋栴檀香神通と須弥相、北方に雲自在と雲自在王、東北方に壊一切世間怖畏と、そして第十六番目が釈迦牟尼仏である。

【三箇の勅宣】

釈尊滅後の弘経を勧めたのが宝塔品の三箇の勅宣である。提婆品の二個の諫暁と合わせ五箇の鳳詔という。

開目抄下（二一七ページ）疑て云く当世の念仏宗・禅宗等をば何なる智眼をもって法華経の敵人・一切衆生の

なわち「久遠下種の寿量品」とは、わが内証の寿量品と等しく、寿量品の仏こそ三徳具備の仏であるゆえに文は譬喩品にあるといえども、その義は寿量品の文底にある。

【不軽品の意義】

法華経の常不軽菩薩品第二十には、大要次のように説かれている。ずっと遠い昔に威音王如来という仏がいた。この仏の滅後、像法年間に、常不軽菩薩という菩薩がいて「我深く汝等を敬う。敢えて軽慢せず。所以は何ん。汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし」といって一切の人々をことごとく礼拝していた。ときに国中に謗法者が充満しており、不軽菩薩を見て、皆これを迫害した。しかし、いかなる迫害にも屈することなく、不軽菩薩は、もっぱら礼拝の一行を全うしていた。かくて不軽菩薩は仏身を成就することを得たが、不軽を軽賤した者は、その罪によって千劫阿鼻地獄に落ちて大苦悩をうけ、その罪を畢え已って、また不軽菩薩の教化をうけ成道することができた、と。日蓮大聖人は、この不軽菩薩について次のように仰せられている。

佐渡御書（九六〇ページ）　日蓮は過去の不軽の如く当世の人人は彼の軽毀の四衆の如し人は替れども因は是一なり。

曾谷入道等許御書（一〇二七ページ）　今は既に末法に入って在世の結縁の者は漸漸に衰微して権実の二機皆悉く尽きぬ彼の不軽菩薩末世に出現して毒鼓を撃たしむるの時なり。

聖人知三世事（九七四ページ）　我が弟子達之を存知せよ日蓮は是れ法華経の行者なり不軽の跡を紹継するの故

に軽毀する人は頭七分に破・信ずる者は福を安明に積まん。

反対する者にも強いて法を説き、信じない者は謗法の罪によって、いったん地獄へ落ちて後、救われることを教示されているのである。日蓮大聖人の仏法とこの不軽菩薩の振舞いは、法体は異なるが、弘経の方軌、方程式は同じである。これを逆縁の功徳という。日蓮大聖人の仏法は、釈迦仏法では救えない謗法不信の者をも救う力があると、次のように仰せられている。

諫暁八幡抄(五八九ページ)　仏は法華経謗法の者を治し給はず在世には無きゆへに、末法には一乗の強敵充満すべし不軽菩薩の利益此れなり。

【浄蔵・浄眼】

法華経妙荘厳王本事品第二十七に説かれている。昔、雲雷音宿王華智仏という仏がいて、その時の王を妙荘厳王といった。王の夫人を浄徳夫人といい、そこに浄蔵・浄眼という二人の子供がいた。

この浄蔵・浄眼は仏の教えを信じ、無量の功徳を得て、母の浄徳夫人と共に出家し、仏のもとで修行した。父はこれに反対したので、母は二人の子供に「おまえたち二人で、父の面前で不思議を現じてみせなさい」といった。そこで二人の子供は大いに仏道に励み、父の前でいろいろな神通力を現じて見せたのである。父王は感心して「おまえたちは、誰について、このような、不可思議な力を学んだのだ。自分もその師匠のもとについて、教えをうけたい」といって、さっそく二人に従って仏の教えをうけ、仏道を成就することができたので

文上脱益在世のための寿量品を略開近顕遠に属せしめ「然も諸の新発意の菩薩、仏の滅後に於いて、若し是の語を聞かば、或は信受せずして、法を破する罪業の因縁を起さん」との意よりして、文底下種末法のための寿量品を動執生疑の文に属せしめるのである。これすなわち、弥勒の質問した内容によって、日蓮大聖人はこのように立て分けられたのである。

しかるに、日什（顕本法華宗の開祖・日蓮大聖人滅後百年ごろ）門流では、一品二半の南無妙法蓮華経といっているが、これは彼の門流はいまだに文底の大事を知らないから、第四の三段、在世脱益の一品二半をとっているにすぎない。

ここに日蓮大聖人の内証の一品二半がはっきりとして、末法の真の仏法、文底下種の本尊が確立すれば、他はすべて小・邪・末・覆の教にほかならないのである。

【地涌の菩薩】

法華経従地涌出品第十五において、釈迦の説法を助け、滅後の弘教を誓った本化の菩薩のこと。すなわち、宝塔品より仏が滅後の弘経を勧進し、大菩薩衆は勧持品で滅後弘経の誓願を立てたが、涌出品にいたって「止みね善男子」といって諸大菩薩の弘経を制止した時、忽然として大地より涌出したのが、地涌の菩薩である。地涌の大士、地涌千界の大菩薩、本化の菩薩、四大菩薩ともいう。無量無数の大菩薩中に四人の大導師があり、上行、無辺行、浄行、安立行の四菩薩がこれである。しかして本化地涌の出現に疑いをもち、その大衆の

疑問に応じて寿量品の説法があって後、神力品にいたって地涌の菩薩に付嘱がなされたのである。末法にご出現の日蓮大聖人は、すなわち地涌の大導師・上行菩薩の再誕であらせられることは、諸御書に明かされているところである。

百六箇抄（八六四ページ）本果妙の釈尊・本因妙の上行菩薩を召し出す事は一向に滅後末法利益の為なり、然る間・日蓮修行の時は後の十四品皆滅後の流通分なり。

要するに本門の序分は、迹化他方の菩薩では、わが内証の寿量品を譲り与えることができない、本化の菩薩でなければ末法において、この大御本尊の弘教はできないとして、地涌の菩薩を呼び出したのである。この序分では、末法において大御本尊を弘通すべき人および資格を定められたものである。

さて迹化・他方・本化の菩薩とはいかなる菩薩をさすかというに、一には菩薩所住の所に約すのと、二には仏の本迹に約して定まるのである。

第一に菩薩所住の所に約すならば、本化の菩薩とは下方空中に住するゆえに下方というのである。この菩薩については、

御義口伝上（七五一ページ）此の四菩薩（本化）は下方に住する故に釈に「法性之淵底玄宗之極地」と云えり、下方を以て住処とす下方とは真理なり、輔正記に云く「下方とは生公の云く住して理に在るなり」と云云、此の理の住処より顕れ出づるを事と云うなり。

また他方の菩薩とは、この娑婆世界以外の仏国土に住する菩薩をさす。すなわち薬王、観音、妙音等である。この他方の菩薩に対して文殊、弥勒等の迹化の菩薩を旧住の菩薩というのである。

第二に仏の本迹の教化に約するならば、すなわち下方の菩薩は、仏の本地において教化した菩薩であるから本化といい、経に「我久遠より来是等の衆を教化せり」といっているのである。文殊等の菩薩は、仏が迹中に教化した菩薩であるから迹化といい、また他方の菩薩は本地の教化でもなく、迹中の教化でもない、ただ他仏の弟子であるから、他方というのである。もしこの意を知るならば、この三種の菩薩とわれらとの関係の親疎がおのずから明らかとなるであろう。

御義口伝上（七五一ページ）に「本化の菩薩の所作としては南無妙法蓮華経なり此れを唱と云うなり導とは日本国の一切衆生を霊山浄土へ引導する事なり、末法の導師とは本化に限ると云うを師と云うなり」とある。本化の菩薩は本来、南無妙法蓮華経を受持しきった振舞いである。迹化の菩薩と本化の菩薩とは、根本的な相違がある。

諸法実相抄（一三六〇ページ）日蓮と同意ならば地涌の菩薩たらんか、地涌の菩薩にさだまりなば釈尊久遠の弟子たる事あに疑はんや……末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり、日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、末来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剰へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし。

所詮、地涌の菩薩とは、日蓮大聖人の弟子であり、御本尊を受持し、ひたすら、広宣流布に邁進する人である。

また、四菩薩は常楽我浄の四徳を表わしている。この点については別項で解説をする。

というのは、文上から、これをこのまま眺めても「我実成仏已来」ということは、すなわち御本尊の本体である。ゆえに、この御本尊の本体を本体として、釈尊が姿を現じているから、本果の世界を現わしているのである。ところが日蓮大聖人になると、仏自体の立派な姿を現じられない。すなわち、仏になる本因を論じ、仏になる本因を行ずるのである。ゆえに本因妙の仏という以外にないのである。日蓮大聖人が生まれながらにして御本尊の体を現わし、御本尊の行を行じられたならば、それは菩薩道でなくなるのである。

菩薩道というのは、菩提薩埵といって、仏になる道を行ずるのをいうのである。

御書のどこを拝読しても、われ仏になって、霊山であなた方を救ってやるとか、これだけの難を忍んだので、私はそのうちに仏になれるだろうと書いてはいないのである。日蓮大聖人のご行動は、本地内証の位においては、仏でいらせられても、行ずるところは、菩薩道である。その菩薩を一括して、すなわち文上でいえば、五十二位の本因初住の文底にあるところの南無妙法蓮華経という、仏の本体を直接信じて、われわれは仏になるのであるから、日蓮大聖人の仏法は本因の妙なのである。ゆえに日蓮大聖人を本因の仏と称し、寿量文上の仏をもって本果の仏と称し、ここに本果妙と本因妙の区別があるのである。

【三時の弘教】

釈尊滅後、正法一千年、像法一千年、末法万年の三時に、論師、人師が出現し、時代の衆生の機根に応じた法を説き、一切衆生を救うという次第の順序をいう。

正法一千年間の弘教

釈尊の在世中に、弘宣付嘱、伝持付嘱を受けたといわれる付法蔵の二十四人が、次次と生まれてきて、仏法を伝持弘通してきた。これら付法蔵の導師は、正法時代の四依の菩薩として、その時代相応の教法を弘めた。すなわち、摩訶迦葉が釈尊から付嘱を受け、付法蔵第五の提多迦までの百年間は、ただ小乗教だけを弘通した。

次の弥遮迦より付法蔵第十の富那奢までは、正法の前の五百年・解脱堅固の時代に小乗教を面として、ごくわずかの大乗教を弘通した。

正法の後の六百年から一千年までの五百年間には、馬鳴菩薩・毘羅尊者・竜樹菩薩・提婆菩薩・羅睺尊者・僧伽難提・僧伽耶奢・鳩摩羅駄・闍夜那・盤陀・摩奴羅・鶴勒夜那・師子尊者等が出現し、初めは外道を学び、次に小乗教を究めて、後には諸大乗教をもって、諸小乗教をさんざんに打ち破っている。これらの諸大菩薩たちは、大乗教をもって小乗教を破ったが、諸大乗教と法華経との勝劣は分明に説いてはいない。大小相対を立てたのみで権実の相対は立てなかった。法華経の肝要たる本迹の十妙、迹門の二乗作仏、本門の久遠実成、已今当最為第一の妙、百界千如、一念三千等の法門は分明には説いていない。これらは正法の後の五百年で、大集経の禅定堅固にあたる時代であった。

像法一千年間の弘教

正法時代一千年を過ぎた後は、インドに仏法が充満していたが、あるいは小乗をもって大乗を破り、あるいは権教をもって実教を隠没するというように、仏法がさまざまに乱れたので、得道する者はようやく少なくなり、仏法によって悪道に堕ちる者が多くなった。像法時代にはいって十五年、仏法が中国へ渡った。像法の前半五百年のうち、初めの百年間は、中国の道教とインドの仏法

との論争が激しく行なわれ、いずれが真実とも決定しかねており、たとえ仏法が真実なりと決定しても、深く信ずる人はいなかった。

このような状態であったから、仏法のなかにも大乗・小乗の別、権教・実教の別があるなどと立て分けるならば、同じ仏教のなかに相違があるので、疑いを起こしてかえって退転し、外道につく者が出てくる。このような恐れがあったから、最初に仏教を伝えた摩騰、竺蘭は自分では知っていたが、大小とか権実の立て分けは何もいわないでいた。

その後、魏・晋・斉・宋・梁の五代の間、仏法のなかで、大小・権実・顕密を争ったが、おのおの流派を生ずるばかりで、何が正当か決定できなかった。このときは、南三北七といって、仏法は十派に分裂していた。すなわち、南には三時・四時・五時とそれぞれの教判を立てる三派が生まれ、北には五時・半満・四宗・五宗・六宗・二宗の大乗・一音等とそれぞれの教判のもとに、偏執して争っていた。しかし、これらの十派の主張の大綱は南の三派中の第三、光宅寺の法雲に代表される華厳経第一、涅槃経第二、法華経第三に一致していた。この時、出現した天台（西紀五三八～五九七年）は、五時八教、三種教相等の最高の教判を示して、公場対決により十宗を屈伏せしめ、法華経迹門の広宣流布を成し遂げたのである。そして、理の一念三千、三諦円融等の法門を説き、弟子・章安に、摩訶止観を説くことによって、出世の本懐を遂げた。こうして、像法の初めの五百年、読誦多聞堅固の時代は、天台の法華経を根底とした、隋・唐時代の華やかな文化が築かれたのであった。

天台の死後、玄奘三蔵が「法華経は勝れた経であるが、深密経には劣る」と主張した。法蔵法師等も、天台に打破られた華厳経を持ち出し、その後、新訳された華厳経をもって「一華厳、二法華、三涅槃」の邪義をか

まえた。さらに後世まで、大きな悪影響をおよぼしたのは、善無畏、金剛智、不空らの真言宗である。彼らの説は「華厳・深密・般若・涅槃・法華経等の勝劣は、顕教内の勝劣であり、釈尊の説法の範囲である。大日経は、大日如来の説法であって、法華経の顕教と相対すれば彼の諸経は民の万言、この大日経は天子の一言である。華厳経、涅槃経は梯を立ててもおよびもつかないが、法華経は大日経に相似た経である。しかし、法華経は釈尊の所説で、民の正直語で、この大日経は大日如来の説、天子の正言である。正言である点では似ているけれども、仏の資格は、釈尊と大日如来とでは、天地雲泥である」と誑言を吐いたのである。

しかも、この誤りを指摘する人もないまま、諸宗はすべて真言宗に転落してしまった。天台宗第九祖の妙楽は、このままに過ぎるならば、天台宗の正義も滅びてしまうだろうと考え、天台の本疏について註釈書を三十巻つくった。摩訶止観輔行伝弘決、法華玄義釈籤、法華文句疏記である。この三十巻の書は、本書の中で重複しているところは一方を削り、意味の明瞭でないものは、これをはっきりしたのみか、天台の時代にはなかったために、天台の破折をのがれていた法相宗と華厳宗と真言宗とを、一時に論破した書である。かくして、天台の正義が再び宣揚されたが、妙楽の死後は、衰亡の一途をたどっていった。しかし、妙楽の弟子・行満座主および道邃和尚のとき、日本の伝教が唐に渡り、一心三観一念三千の深旨を伝付せられた。こうして、伝教は南都六宗の邪義を徹底して責めたため、南都六宗七大寺の学者は蜂起し、烏合した。延暦二十一年(八〇二年)正月十九日、桓武天皇は、高雄寺に行幸になり、七大寺の学僧と伝教を召しあわせ、公場対決を命じられた。六宗の学僧たちは、一一に経や論釈に照らして責められ、一言も答えられなかった。天皇も驚かれて、伝教に詳しくお尋ねがあり、重ねて勅宣を下して十四人の学者たちを厳しく責められたので、みな帰伏の謝り状を

奉った。この伝教の仏教統一は、仏教の真髄が、法華経の哲学にあり、天台の五時八教の教判、理の一念三千、三諦円融の法門等を最高の法理として認めさせたことに大きな意義がある。八二二年、伝教の入滅の直後、迹門の戒壇の建立が聴許せられている。しかし、中国の天台宗が善無畏等によって、真言に転落したのに対し、日本においても、弘法が、天台宗の正義を乱す元凶となった。

清澄寺大衆中（八九三ページ）に「真言宗は法華経を失う宗なり、是は大事なり……日本国の法華経の正義を失うて一人もなく人の悪道に堕つる事は真言宗……」とある。

伝教は中国へ留学して帰るとき、天台、真言をわが国へもってきて、天台宗を日本の皇帝に授け、真言を六宗の僧に習学させた。その後、伝教は、真言をはっきりと破折しなかったが、その原因は、一には、戒壇を建てるか否かの争論が激しかったため、なるべく敵を少なくして戒壇を建立せんがためであり、二には、末法に破折させようと残されたものと思われる。しかし、伝教の依憑集では、はっきりと真言を破折している。その後、真言宗は開祖の弘法、天台宗の慈覚らの悪僧によってますます邪義が激しくなった。弘法は、十住心論、秘蔵宝鑰二教論に、法華経は大日経に対すれば「戯れの論」であり「大日如来に比べたら釈迦は無明の辺域である」とか、「天台が真言の醍醐を盗んで天台宗を醍醐と定めた」と反対のことをいうにいたった。後には慈覚・智証は、身は天台の座主でありながら、真言を第一とし、理同事勝と立てている。

結局、誰もこの邪義を破折するものがいないままに、日本国中に、真言の邪義が弘まった。これは、承久の乱による、後鳥羽上皇等、三上皇が、鎌倉幕府の手によって島流しにされるという現実を生み、このことは、真言亡国の現証といえよう。像法時代は、中国、日本と、天台宗の法華経迹門が流布されたが、結局、真言の

悪法により、亡国の姿となって、末法にはいったのである。

末法の御本仏日蓮大聖人の御弘通

末法にはいって二百二年、建長五年(西紀一二五三年)四月二十八日、日本の国に初めて末法の衆生を救う三大秘法の南無妙法蓮華経が唱えられた。日蓮大聖人が御年三十二歳にして、末法の一切衆生を救わんと立宗宣言をなされたのである。報恩抄(三二八ページ)に「問うて云く天台伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り……一には日本・乃至一閻浮提・一同に本門の教主釈尊を本尊とすべし、所謂宝塔の内の釈迦多宝・外の諸仏・並に上行等の四菩薩脇士となるべし、二には本門の戒壇、三には日本・乃至漢土・月氏・一閻浮提に人ごとに有智無智をきらはず一同に他事をすてて南無妙法蓮華経と唱うべし、此の事いまだ・ひろまらず一閻浮提の内に仏滅後・二千二百二十五年が間一人も唱えず……」とある。この御文は三大秘法を顕わされた御文で、きわめて重要な意味がある。第一には日蓮大聖人の三大秘法は、釈迦も含めて、滅後、迦葉、阿難、馬鳴、竜樹、天台、伝教等のいまだかつて弘通したことのない大白法なのである。その理由を曾谷入道等許御書(一〇二八ページ)に「一には自身堪えざるが故に二には所被の機無きが故に三には仏より譲り与えられざるが故に四には時来らざるが故なり」と教示になっている。すなわち、日蓮大聖人は、久遠元初以来、文底秘沈の名字の妙法を受持されていたゆえに、自身能堪であられ、また末法の衆生の機根は本因下種の機であるから、日蓮大聖人は本因下種の要法たる三大秘法を弘められたのである。また付嘱については文底本因妙は迹化の菩薩に対しては付嘱されず、ただ本化地涌の菩薩にかぎり付嘱があったのである。また時については、後五百歳中広宣流布とあるように、日蓮大聖人の三大秘法こそ末法流布の大白法なのである。さて、三大秘法の相貌については、報恩抄の文に説き明か

されている。

すなわち、本門の本尊については「本門の教主釈尊を本尊とすべし」（三二八ページ）とあるが、これは、人本尊を示されたものである。教主釈尊には、多くの義があり、蔵教、通教、別教、法華経迹門、本門、本門寿量品文底下種の教主釈尊とある。ここに仰せの教主釈尊とは、本門寿量品文底下種の教主釈尊である。すなわち、久遠元初の自受用身であられ、末法に日蓮大聖人とご出現の教主であらせられる。この久遠名字の釈尊は人法一箇であらせられ、本尊となすところの教主釈尊とは、事行の一念三千の大曼荼羅である。本門の題目については「一同に他事をすてて」が信、「南無妙法蓮華経と唱う」とは行の題目である。本門の戒壇については三大秘法抄等にお示しのとおりである。また同じく報恩抄（三二九ページ）に「日蓮が慈悲曠大ならば南無妙法蓮華経は万年の外・未来までもながるべし、日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり、無間地獄の道をふさぎぬ、此の功徳は伝教・天台にも超へ竜樹・迦葉にもすぐれたり、極楽百年の修行は穢土一日の功徳に及ばず、正像二千年の弘通は末法の一時に劣るか」と仰せであるが、ここで、日蓮大聖人の三徳を明かされ、末法の御本仏たることを証明されている。「日蓮が慈悲……未来までもながるべし」は親の徳、「日本国の一切衆生の盲目をひらける功徳あり」は師の徳、「無間地獄の道をふさぎぬ」は主の徳。そしてこの主師親の三徳を具備した日蓮大聖人の功徳は、迹仏たる天台・伝教にも超えるものであると結ばれている。さて、この三大秘法は、末法今時にこそ、必ず流布する大法なのである。

撰時抄（二六四ページ）には妙法流布の必然を次のように明かされている。

「今末法に入って二百余歳・大集経の於我法中・闘諍言訟・白法隠没の時にあたれり仏語まことならば定んで

一閻浮提に闘諍起るべき時節なり、……是をもって案ずるに大集経の白法隠没の時に次いで法華経の大白法の日本国並びに一閻浮提に広宣流布せん事を疑うべからざるか、……大地は反覆すとも高山は頽落すとも春の後に夏は来らずとも日は東へかへるとも月は地に落つるとも此の事は一定なるべし」とある。

歴史的にみて、当時は、世界中が戦乱のなかにあった。日本では、承久の乱により三上皇が島流しされ、天皇が廃せられた翌年（西紀一二二二年）に、日蓮大聖人は御誕生になった。その後も国内には内紛や謀叛が相次いで起こり、中国大陸では蒙古の勃興により各国が征服されて、次第に日本にもその危機が迫りつつあった。弘安二年（西紀一二七九年）には南宋が滅びている。西は中央アジアからヨーロッパに、東は朝鮮半島までことごとく蒙古の版図にはいってしまった。西洋では東ローマ帝国が滅亡しラテン帝国の時代であり、第五次、第六次、第七次の十字軍が派遣されて、激烈な宗教戦争が戦われていた。この時には国が滅亡することはなかったが、日蓮大聖人滅後六百数十年にして、日本は世界の各国と大戦争し、ついに敗戦亡国の運命に陥った。

この第二次世界大戦こそ、釈尊の予言した前代未聞の大闘諍であり、この時こそ、化儀の広宣流布の時機と確信し、創価学会は立ち上がったのである。

【五五百歳広宣流布】

末法において、日蓮大聖人の三大秘法の大仏法が、日本国中、さらには全世界に弘まることであり、「五五

百歳」とは、釈尊が大集経に末来の時を予言して説いているように、釈尊滅後第五番目の五百年、闘諍堅固の時、すなわち末法をいう。

「我が滅後に於て五百年の中は解脱堅固・次の五百年は禅定堅固已上一千年 次の五百年は読誦多聞堅固・次の五百年は多造塔寺堅固已上二千年 次の五百年は我が法の中に於て闘諍言訟して白法隠没せん」と。また法華経の第七薬王品には「我が滅度の後・後の五百歳の中に広宣流布」と。

弥勒菩薩の瑜伽論に云く「東方に小国有り其の中に唯大乗の種姓のみ有り」

肇公の翻経の記に云く「大師須梨耶蘇摩左の手に法華経を持し右の手に鳩摩羅什の頂を摩で授与して云く仏日西に入って遺耀将に東に及ばんとす此の経典東北に縁有り汝慎んで伝弘せよ」

遵式の筆に云く「始め西より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」

根本大師の記に云く「代を語れば則ち像の終り末の初・地を尋ぬれば唐の東・羯の西・人を原ぬれば則ち五濁の生・闘諍の時なり」

又云く「正像稍過ぎ已って末法太だ近きに有り法華一乗の機・今正しく是れ其の時なり何を以て知る事を得ん安楽行品に云く末世法滅の時なり」（以上は曾谷入道等許御書一〇三七ページ・一〇三八ページ）

天台大師云く「後の五百歳遠く妙道に沾わん」（撰時抄二五九ページ）

妙楽大師云く「末法の初め冥利無きにあらず」（撰時抄二六〇ページ）

以上のごとく釈尊をはじめとした多くの予言に対して日蓮大聖人は、次のごとく仰せられて五五百歳に広宣流布実現を確信されている。

撰時抄（二六〇ページ）彼の天台の座主よりも南無妙法蓮華経と唱うる癩人とはなるべし。

諸法実相抄（一三六〇ページ）末法にして妙法蓮華経の五字を弘めん者は男女はきらふべからず、皆地涌の菩薩の出現に非ずんば唱へがたき題目なり、日蓮一人はじめは南無妙法蓮華経と唱へしが、二人・三人・百人と次第に唱へつたふるなり、未来も又しかるべし、是あに地涌の義に非ずや、剰へ広宣流布の時は日本一同に南無妙法蓮華経と唱へん事は大地を的とするなるべし。

以上の御文にみるように、広宣流布のご確信を述べられ、最後に本門戒壇の建立を、第二祖日興上人に遺付せられたのである。

さらに日蓮大聖人は末法に必ず広宣流布すべきのみならず、日本より起こる日蓮大聖人の仏法が、中国・インドにまで流布すべき確信を、次のごとく述べられている。

聖人知三世事（九七四ページ）教主釈尊既に近くは去って後三月の涅槃之を知り遠くは後五百歳・広宣流布疑い無き者か。

顕仏未来記（五〇七ページ）此の人は守護の力を得て本門の本尊・妙法蓮華経の五字を以て閻浮提に広宣流布せしめんか……遵式の云く「始西より伝う猶月の生ずるが如し今復東より返る猶日の昇るが如し」等云云、……仏記に順じて之を勘うるに既に後五百歳の始に相当れり仏法必ず東土の日本より出づべきなり。

諫暁八幡抄（五八八ページ）天竺国をば月氏国と申すは仏の出現し給うべき名なり、扶桑国をば日本国と申すあに聖人出で給わざらむ、月は西より東に向へり月氏の仏法の東へ流るべき相なり、日は東より出づ日本の仏法の月氏へかへるべき瑞相なり。

一国覚らず知らず、舎衛の三億聞かず見ず、諸天に着楽し、および難処に生じて、来たり聴受せず」とある。

三億――大論、止観の文により、舎衛の三億とは、九億の家の三分の一、すなわち仏を眼のあたり見ない者三億、またはまったく聞いたことのないもの三億をさすことは明らかである。古代インドにおいては、今日の十万を億と名づけた。

したがって、舎衛の三億は三十万であり、舎衛全体では九十万戸があったと推定される。しかし、釈迦在世に盛んだった国勢も、滅後は次第に衰退し、ついに滅びて十九世紀中葉までは、その古址も判然としない状態であった。

【一念三千】

一念三千は仏教の極理である。釈尊はこれを本懐として法華経迹門方便品にいたり「諸法実相」に約して、ほぼこれを説いた。ついで本門寿量品にいたり「因果国の三妙」に約して仏身の振舞いのうえからこれを説いた。これを受けて天台大師は像法時代に出現して、摩訶止観の第五で次のように説いたのである。

観心本尊抄（二三八ページ）　摩訶止観第五に云く世間と如是と一なり開合の異なり。「夫れ一心に十法界を具す一法界に又十法界を具すれば百法界なり一界に三十種の世間を具すれば百法界に即三千種の世間を具す、此の三千・一念の心に在り若し心無んば而已介爾も心有れば即ち三千を具す乃至所以に称して不可思議境と為す意此に在り」

さて、十界とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩・仏である。十如とは如是相・性・体・

力・作・因・縁・果・報・本末究竟等である。三世間とは五陰と衆生と国土の世間である。

五陰とは色・受・想・行・識の五であり、陰とは〝おおいかくす〟の意と〝あつまる〟の二つの意味がある。〝おおいかくす〟の意で九界に約せば善法をおおいかくしており、仏界に約せば慈悲におおわれていることになる。〝あつまる〟の意味で九界に約せば生死のあつまりであり、仏界に約せば常楽があつまっていることになる。

五陰が仮に和合するのを衆生という。十界にはそれぞれの衆生がおり、仏界は尊極の衆生である。

国土世間とは十界の住する所である。仏は寂光土、菩薩は実報土、二乗は方便土、天は宮殿、人は大地、地獄は赤鉄に住する等のごときである。

世間とは差別の義である。Aの人とBの人を比べて五陰の差別を五陰世間という。仏界の衆生と人界の衆生の差別を衆生世間という。同様に国土の差別を国土世間という。（十界互具、十如是、三世間の項参照）

ところで、一念三千には事と理があり、迹門は理の一念三千であり、本門は事の一念三千である。与えて論ずれば迹門を理の一念三千と名づけるが、奪っていえば迹門を真実の一念三千ということはできない。

観心本尊抄（二五三ページ）　像法の中末に観音・薬王・南岳・天台等と示現し出現して迹門を以て面と為し本門を以て裏と為して百界千如・一念三千其の義を尽せり、但理具を論じて事行の南無妙法蓮華経の五字並びに本門の本尊未だ広く之を行ぜず所詮円機有って円時無き故なり。

開目抄上（一九七ページ）　迹門方便品は一念三千・二乗作仏を説いて爾前二種の失・一つを脱れたり、しかりと・いえども・いまだ発迹顕本せざれば・まことの一念三千もあらはれず二乗作仏も定まらず、水中の月を

見るがごとし・根なし草の波の上に浮べるにに似たり。

本迹の一念三千に以上のような相違があるとはいえ、文底下種本門に対するときは、法華経の本迹二門ともに理の一念三千となる。すなわち一念三千の法門とは、寿量品の文底に秘し沈められた三大秘法の南無妙法蓮華経である。

開目抄上（一八九ページ）一念三千の法門は但法華経の本門・寿量品の文の底にしづめたり、竜樹・天親・知ってしかも・いまだ・ひろいいだ拾出さず但我が天台智者のみこれをいだ懐けり。

本因妙抄（八七七ページ）問うて云く寿量品・文底の大事と云う秘法如何、答えて云く唯密の正法なり秘す可し秘す可し一代応仏のいきをひかえたる方は理の上の法相なれば一部共に理の一念三千迹の上の本門寿量ぞと得意せしむる事を脱益の文の上と申すなり、文の底とは久遠実成の名字の妙法を余行にわたさず直達の正観・事行の一念三千の南無妙法蓮華経是なり。

【事と理】

諸法の実相は事と理に分けられる。事とは宇宙の森羅万象の事実の姿をいい、その姿のなかにある法則が理である。ゆえに生命を論ずる場合は必ず事理の二面から論じなければならない。

釈尊の時代には、宇宙の具体的事相、また世間の具体的人間の姿を通して、絶対にくずれない生命の実相を悟るために、具体的修行を説いた。六波羅蜜行もその修行のなかの一つである。そしてこの修行を事といい、

この修行を通じて、生命の実相の理を悟ろうとした。ゆえに釈迦仏法においては、事より理が勝れているのである。そして法華経に一念三千の法理を説き明かしたのである。

しかし末法にはいると事と理の内容は変わるのである。すなわち、日蓮大聖人は一念三千の理を、凡身のわれわれに悟らせるために、具体的にどうすべきかをお考えになり、宇宙の生命、すなわち、一念三千の法理の当体として一幅の大曼荼羅をご図顕になられたのである。ゆえにこの大曼荼羅には、一念三千の理を含むゆえに事は理より勝れていることになる。そしてこの曼荼羅を信受し唱題することにより、一念三千の当体をわが凡身に湧現できるのである。実に甚深の法門なのである。

草木成仏口決（一三三九ページ）　一念三千の法門をふりすすぎたてたるは大曼荼羅なり、当世の習いそこないの学者ゆめにもしらざる法門なり。

【十界互具】

十界互具とは地獄より仏界にいたる十界のおのおのに十界を具していることである。

観心本尊抄（二四〇ページ）　法華経第一方便品に云く「衆生をして仏知見を開かしめんと欲す」等云云是は九界所具の仏界なり、寿量品に云く「是くの如く我成仏してより已来甚大に久遠なり寿命・無量阿僧祇劫・常住にして滅せず諸の善男子・我本菩薩の道を行じて成ぜし所の寿命今猶未だ尽きず復上の数に倍せり」等云云此の経文は仏界所具の九界なり、経に云く「提婆達多乃至天王如来」等云云地獄界所具の仏界なり、

し、日蓮大聖人を僧宝と立てているが、これは大なる僻見である。なぜならば、仏法僧はその内容において、一体不二でなければならないのに、すでに仏宝と法宝とに勝劣の矛盾があり、日蓮大聖人を僧宝とする等は、日蓮大聖人こそ下種の御本仏たることを知らぬ証である。

諸法実相抄（一三五八ページ）　されば釈迦・多宝の二仏と云うも用の仏なり、妙法蓮華経こそ本仏にては御座候へ。

撰時抄（二八四ページ）　日蓮は日本第一の法華経の行者なる事あえて疑ひなし、これをもってすいせよ漢土月支にも一閻浮提の内にも肩をならぶる者は有るべからず。

百六箇抄（八六三ページ）　下種の法華経教主の本迹。自受用身は本・上行日蓮は迹なり、我等が内証の寿量品とは脱益寿量の文底の本因妙の事なり、其の教主は某なり。

以上の御文から、末法の仏宝は、日蓮大聖人であることは明白である。

【種熟脱】

種とは下種のことで、仏にあって、仏になる種を得ることであり、熟とは過去の下種が薫発し、調養することで、脱とは下種された仏種が調養して、ついに仏と同じ境涯を得るにいたる、すなわち成仏することをいう。

秋元御書（一〇七二ページ）　種熟脱の法門・法華経の肝心なり、三世十方の仏は必ず妙法蓮華経の五字を種として仏になり給へり。

観心本尊抄（二四九ページ）設い法は甚深と称すとも未だ種熟脱を論ぜず還って灰断に同じ化の始終無しとは是なり。

以上のように種熟脱の法門は仏法を論ずるにあたって肝要である。日蓮大聖人は「法華経は種の如く仏はうへての如く衆生は田の如くなり」（曾谷殿御返事一〇五六ページ）と仰せられている。すなわち下種し熟し脱するの過程が明らかにされたのは、法華経の迹門化城喩品において、大通下種三千塵点劫の法門が最初である。すなわち大通智勝仏の時に下種をうけて、それがしだいに熟して釈尊にあい、さらに未来不可思議劫を経て成仏すると説くから、これを熟益仏法という。次いで本門寿量品においては五百塵点劫以来の種熟脱が明らかにされて師弟の遠近が説き示されている。

これを要するに釈迦仏法においては五百塵点劫に下種し、大通仏および爾前四十余年・法華経の迹門までを熟益となして、本門寿量品にいたって脱せしめるのが文上至極の義である。ゆえに脱益仏法という。

しかるに末法においては本未有善の衆生であるから寿量文上の脱益の仏法はまったく利益がなく、文底下種仏法のみが真に末法の衆生を救う利益があるのである。日蓮大聖人の文底下種仏法は、下種益といい、妙法五字の下種をうけ、直達正観して、ただちに仏の境涯を得るのであって、末法においては、この下種益の御本尊によってのみ成仏することができるのである。ゆえに観心本尊抄（二四九ページ）には「彼は脱此れは種なり」と仰せられ、御義口伝下（七五三ページ）には「当品（寿量品）は末法の要法に非ざるか其の故は此の品は在世の脱益なり題目の五字計り当今の下種なり、然れば在世は脱益滅後は下種なり仍て下種を以て末法の詮と為す」と仰せられている。

【三大秘法】

日蓮大聖人の教義の根本は三大秘法であり、大聖人出世のご本懐は三大秘法の建立である。三大秘法とは本門の本尊、本門の戒壇、本門の題目である。

末法における戒定慧を、虚空不動戒、虚空不動定、虚空不動慧といい、日蓮大聖人が三大秘法として決定された。

本門の本尊とは、日蓮大聖人が弘安二年十月十二日に御図顕の本門戒壇の大御本尊である。本門の題目とは、本門戒壇の大御本尊を信じて南無妙法蓮華経と唱えて修行することである。本門の戒壇とは、本門の本尊を安置し奉って信心修行に励む場所をいう。

日蓮大聖人は建長五年四月二十八日、初めて題目をご建立になり、ついで佐渡において御本尊の開顕があり、弘安二年には本門戒壇の大御本尊を建立あそばされ、広宣流布・本門戒壇の建立は未来に遺命あそばされたのである。しかして三大秘法の依文を御書に拝するとき、

四条金吾殿御返事（一一一六ページ）文永九年五十一歳　今日蓮が弘通する法門は・せばきやうなれども・はなはだふかし、其の故は彼の天台・伝教等の所弘の法よりは一重立入りたる故なり、本門寿量品の三大事とは是なり。

義浄房御書（八九二ページ）文永十年五十二歳　寿量品の自我偈に云く「一心に仏を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜しまず」云云、日蓮が己心の仏界を此の文に依って顕はすなり、其の故は寿量品の事の一念三千の三大秘法

を成就せる事・此の経文なり秘す可し秘す可し。

法華行者逢難事（九六五ページ）文永十一年五十三歳　竜樹・天親は共に千部の論師なり、但権大乗を申べて法華経をば心に存して口に吐きたまわず此に口伝有り、天台伝教は之を宣べて本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華経の五字と之を残したもう。

法華取要抄（三三六ページ）文永十一年五十三歳　問うて云く如来滅後二千余年・竜樹・天親・天台・伝教の残したまえる所の秘法は何物ぞや、答えて云く本門の本尊と戒壇と題目の五字となり。

報恩抄（三二八ページ）建治二年五十五歳　問うて云く天台伝教の弘通し給わざる正法ありや、答えて云く有り求めて云く何物ぞや、答えて云く三あり、末法のために仏留め置き給う。

御義口伝下（七五二ページ）寿量品の事の三大事とは是なり。

御義口伝下（七六〇ページ）建立御本尊等の事。御義口伝に云く此の本尊の依文とは如来秘密神通之力の文なり、戒定慧の三学は寿量品の事の三大秘法是れなり、日蓮慥に霊山に於て面授口決せしなり。

この三大秘法は、釈尊出世の本懐たる法華経の本門寿量品の文底に秘し沈められているのであり、同じく神力品において付嘱されている。ゆえに、

三大秘法抄（一〇二一ページ）問う所説の要言の法とは何物ぞや、答て云く夫れ釈尊初成道より四味三教乃至法華経の広開三顕一の席を立ちて略開近顕遠を説かせ給いし涌出品まで秘せさせ給いし実相証得の当初修行し給いし処の寿量品の本尊と戒壇と題目の五字なり。

三大秘法抄（一〇二三ページ）此の三大秘法は二千余年の当初・地涌千界の上首として日蓮慥かに教主大覚世

尊より口決相承せしなり、乃至法華経を諸仏出世の一大事と説かせ給いて候は此の三大秘法を含めたる経にて渡らせ給えばなり。

三大秘法の開合

さて、このように三大秘法といっても、実は御本尊の一大秘法に収まるのである。ゆえに諸御書に「教主釈尊の一大事の秘法を霊鷲山にして相伝し・日蓮が肉団の胸中に秘して隠し持てり」（南条殿御返事一五七八ページ）等と仰せられている。

本門の御本尊を安置し奉り、信心・修行するのが題目であり、安置し奉る所がすなわち戒壇である。このように三大秘法は合しては一大秘法となり、さらに開いては六大秘法となる。すなわち本尊に人と法、題目に信と行、戒壇に事と義がある。

人の本尊とは久遠元初の自受用身たる日蓮大聖人であらせられ、法の本尊とは文底下種事行の一念三千の南無妙法蓮華経である。人法に開くといっても人即法、法即人で而二不二であらせられる。題目とは御本尊を信じ奉り唱題・折伏することであり、すなわち信・行に開かれる。

信のない行は盲が千里の道をくわだてるようなものであり、行のない信は跛が千里の道をくわだてるようなものである。いずれも目的を達することはできない。すなわち信・行に開くといっても、二にして、しかも一である。

また戒壇には事と義がある。文底秘沈抄に「夫れ本門の戒壇に事有り義有り、所謂義の戒壇とは即ち是れ本門の本尊所住の処・義戒壇に当る故なり……事の戒壇とは一閻浮提の人懺悔滅罪の処なり但然るのみに非ず梵天帝釈等も来下して踏みたもうべき戒壇なり」とある。

【久遠名字即】

久遠とは本有常住の生命観であり、名字即とは六即位のなかで、初めて仏法の信仰にはいった位である。日蓮大聖人の仏法においては、久遠名字即の凡夫こそ本仏であり、また名字即の位において真に即身成仏できる衆生である。

御義口伝下（七五九ページ）　御義口伝に云く此の品の所詮は久遠実成なり久遠とははたらかさず・つくろわず・もとの儘と云う義なり、無作の三身なれば初めて成ぜず是れ働かざるなり、卅二相八十種好を具足せず是れ繕わざるなり本有常住の仏なれば本の儘なり是を久遠と云うなり、久遠とは南無妙法蓮華経なり実成無作と開けたるなり云云。

三世諸仏総勘文教相廃立（五六六ページ）　十法界の依報・正報は法身の仏・一体三身の徳なりと知って一切の法は皆是れ仏法なりと通達し解了する是を名字即と為す名字即の位より即身成仏す故に円頓の教には次位の次第無し。

さて久遠名字本因妙の仏法は日蓮大聖人の仏法であり、釈尊は三十二相八十種好をもって身を荘厳する本果脱益の仏である。すなわち下種本因妙の仏は名字凡夫の姿で世に出現するのである。

三世諸仏総勘文教相廃立（五六八ページ）　釈迦如来・五百塵点劫の当初・凡夫にて御坐せし時我が身は地水火風空なりと知しめして即座に悟を開き給いき、後に化他の為に世世・番番に出世・成道し在在・処処に八相

作仏し云云。

右の御文において凡夫位で開悟した釈迦如来とは、末法に凡夫位で出現する日蓮大聖人と一体である。ついで化他のために身を荘厳して出世成道する釈尊が、すなわち本果妙の釈尊である。本果第一番成道の釈尊ですら、垂迹化他の仏であって、常住の本仏ではない。この点において日蓮正宗と他の諸宗とは、その教義がまったく相容れないのである。

当体義抄（五一三ページ）　至理は名無し聖人理を観じて万物に名を付くる時・因果俱時・不思議の一法之れ有り之を名けて妙法蓮華と為す此の妙法蓮華の一法に十界三千の諸法を具足して闕減無し之を修行する者は仏因・仏果・同時に之を得るなり、聖人此の法を師と為して修行覚道し給えば妙因・妙果・俱時に感得し給うが故に妙覚果満の如来と成り給いしなり。

右の御文について日寛上人は次のごとく釈せられている。すなわち因果俱時の下は名玄義、此の妙法蓮華の一法の下は体玄義、之を修行する者はの下は宗玄義、聖人此の法を師と為しての下は用玄義なりと。ここに本因妙下種家の仏法を五重玄に配立してきわめて明らかとなるのである。

すなわち聖人とは名字即の釈尊なるがゆえに位妙にあたる。この名字凡夫の釈尊が一念三千の妙法蓮華経を本尊として修行したので、すなわち境妙である。修行とは信心・唱題であり、信心は智妙にあたり、唱題は行妙である。この境智行位を合して本因妙となし、この本因妙の修行によって即座に開悟し本果にいたるのである。これこそ日蓮大聖人の仏法の奥底であり極説である。

当体義抄（五一三ページ）　釈尊五百塵点劫の当初此の妙法の当体蓮華を証得して世世番番に成道を唱え能証所

証の本理を顕し給えり。

右の御文においても日蓮宗各派は天台に准じて五百塵点の当初を本果第一番の釈尊であると立てている。しかし、当流の意は久遠元初名字凡夫位の御時をさして、五百塵点の当初という。

百六箇抄（八六四ページ）　久遠の釈尊の修行と今日蓮の修行とは芥子計も違わざる勝劣なり云云。

本因妙抄（八七七ページ）　釈尊・久遠名字即の位の御身の修行を末法今時・日蓮が名字即の身に移せり。

【境智冥合】

境は客観世界であり、智は主観的智慧である。たとえば一家の生活を安定しようとして努力し、実際に安定したとする。一家の生活は境であり、努力する自分が智で、安定した生活は境智冥合である。こうしてみると、われわれの生活には境智の冥合しない場合が実に多い。たとえ一家を安定し、事業が繁盛したとしても、自分自身の悩みはもちろん、他人や社会の苦しみを徹底的に救済できるわけがない。

しかるに仏の智慧は甚深無量であり、境智冥合の当体なのである。すなわち宇宙全体を境として、そのすべてを解決できる智をもっておられるのが仏である。また人と法の一致、人法一箇でもある。ゆえに、

曾谷殿御返事（一〇五五ページ）　夫れ法華経第一方便品に云く「諸仏の智慧は甚深無量なり」云云、釈に云く「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量と云う」と、抑此の経釈の心は仏になる道は豈境智の二法にあらずや、されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の姿を云うなり、而るに境の淵